

R7年度 自己評価結果公表

本年の教育・保育目標及び方針

《教育・保育目標》

- ☆ 安定した（丈夫な）心と身体を育み、生活（生きる）する力をつける
 - ・明るい子（誰とでも仲良くでき、感性や創造力が豊かな子）
 - ・強い子（健康で、優しく思いやりがあり、最後まで頑張れる子）
 - ・よく遊ぶ子（自然と親しみ、遊びや運動で身体を鍛え、ルールや約束を守れる子）
 - ・あいさつのできる子（心の通い合うあいさつができ、相手の気持ちに寄り添える子）

《教育・保育方針》

- ☆ 子どもの生活や育ちの繋がりを配慮した保育・遊びの中から、自分らしく生きる力を育む
- ☆ 子どもの主体性を大切にし、自主性や創造力をつけると共に、自ら様々なことを乗り越えられる力をつける
- ☆ 保育・食育活動を通じて豊かな感性を育み、心も身体も健やかに、のびのびと丈夫で元気な子を育てる

本年度の重点目標

- ・こども主体の教育・保育、食育を行い、こども自らの経験（学び）を大切にする
- ・職員間の連携をしっかりと行い、教育・保育（食育）の充実をはかる
- ・担当制やグループ保育、個別対応を行い一人ひとりに寄り添った保育を行う
- ・保育システムやノンコンタクトタイムを活用し、事務処理の軽減を行い保育の充実をはかる。

評価項目別の達成および課題状況

項目	評価・課題
本園の保育・教育理念・目標・方針の認識度	リーダー層として理念や重点目標への理解は深く、日々の保育やクラス運営、個別対応（担当制・主体性保育）のベースとなっている。しかし、新入職員、途中採用、パート職員への理念の落とし込みや意識付けのサポートにはまだ課題が残るため、次年度は園全体（各クラス・学年）での振り返りや確認作業を強化し、浸透をさらに確実にする。
クラス（給食室）間の連携	クラス内や給食室（栄養士・調理員）との連携は非常に良好に図れている。日々の子どもの姿、気になること、喫食状況をタイムリーに伝え合い、勤務時間にはばらつきがある中でも、お互いに声を掛け合って情報を全員で共有し、スムーズに援助ができる体制を維持できた。
フロア・園全体での連携	各フロアや担当ごとに毎日の連絡・共有事項を漏れなく伝える体制を意識し、職員が無理なく時間内に業務を終えられるよう、互いにカバーし合える好循環が生まれた。一方で、こども園と保育園の間、また以上児と未満児（別フロア）の間での伝達事項に一部共有漏れが生じる場面もあったため、今後はインカムや「先生トーク」などのICTツールをさらに有効活用し、より強固な全体連携体制を構築する。
教育・保育（食育）内容	こども主体の保育、環境構成の工夫、育児担当制に沿った丁寧な個別対応や少人数保育をリーダーとして牽引した。子どもの様子を注意深く観察し、子どもの「やりたい」という声や好きなものから活動を広げて主体性を引き出す援助に努めることができた。食育面でも無理強いしない援助を徹底し、発達段階に合わせた働きかけを行った。
保育（食育）知識・技術の向上	各種研修（園内研修、気になる子の対応など）や外部・キャリアアップ研修へ積極的に参加し、自らの知識をアップデートした。さらに、研修で学んだ内容や気づきを自分だけのものにせず、クラスや他の職員へ積極的に共有（アウトプット）することで、園全体の保育の質の向上と底上げへ繋げることができた。
子育て支援（保護者・地域）	コドモンや送迎時の直接の会話、連絡帳での丁寧なやり取りを通じて、保護者と密な信頼関係を築いた。保護者の悩みや個別ニーズに寄り添った丁寧な相談支援を心がけ、気になる様子が見られた際にはその都度共有し、家庭と園とで一緒に対応を考え、必要な療育支援への接続等に繋げることができた。
小学校・地域との連携	年長児クラスにおける小学校との交流会など意識的な活動を行えた。また、乳幼児クラスを含め、散歩中や外出先で出会う地域住民や来客に対して笑顔で率先して挨拶を交わし、親しみを持ってもらえる関係作りに努めた。今後はさらに地域との繋がりを意識した活動の機会を模索していく。
リーダー職として（該当者のみ）	今年度は大きなトラブルや事故もなく、安全に過ごすことができた。多忙な中や職員体制の変更などの変化がある中でも、フロアや学年のメンバーと積極的に意見交換を行い、職員が疑問や気づきを相談しやすい環境作りを意識した。また、新しく加わった職員が安心して関わられるよう役割分担を工夫するなど、働きやすい環境を整えられた。 一方で、日々の業務に追われ、個々の職員の細かな変化やフォローが十分に行き届かなかった場面や、園間・クラス間の伝達漏れが発生した部分もあった。次年度はより広い視野を持ち、職員一人ひとりがゆとりを持って保育に集中できるよう、業務割り振りの見直しや早めの声掛けを行うとともに、ICTツールも連動させた確実な情報共有体制を確立していく。
総評	今年度は、こども主体の教育・保育、育児担当制や少人数・コーナー保育の実践を重点的に推進した。職員一人ひとりが子どもの興味・関心や主体的な学びを丁寧に観察し、環境構成を工夫しながら日々の保育に反映させる姿勢が定着してきたことは大きな成果である。園内研修やキャリアアップ研修の積極的な活用により、特に「気になる子への対応」やドキュメンテーションを用いた振り返りにおいて、職員の専門性と意識の向上が見られた。また、コドモン等のICTツールの活用やノンコンタクトタイムの導入によって、事務処理の効率化と保育の質の充実が着実に両立されつつある。 フロアリーダーを中心に各クラスや給食室との情報共有（報連相）はおおむね円滑に機能しており、大きなトラブルや事故もなく、安全で温かい安心できる保育環境を維持できたことを評価したい今年度は、法人・園の最重要テーマである「こども主体の教育・保育、食育の実践」および「育児担当制や少人数・コーナー保育の定着」に向けて、両園がそれぞれの特性を活かしながら着実に歩みを進めた1年であった。職員一人ひとりが子どもの興味・関心や「やりたい」という主体的な声を丁寧に汲み取り、主体性を引き出す環境構成や無理のない食育援助に努めたことは大きな成果である。 また、園内研修（気になる子の対応、ドキュメンテーション等）やキャリアアップ研修への積極的な参加を通じ、学んだ知識を園内で共有・実践する好循環が生まれ、職員全体の専門性の向上が見られた。管理面においては、コドモン等の保育システムやノンコンタクトタイムの活用により、事務処理の効率化と保育の充実が両立されつつある。職員体制の変更などの変化に対しても、リーダー層を中心に互いに声を掛け合い、カバーし合える温かく強固なチームワークが発揮され、年間を通じて大きなトラブルや事故もなく安全な保育環境を維持できた。 【次年度への課題と展望】 一方で、さらなる保育の質向上のために、次年度に向けて以下の課題に取り組む。 1. 理念のさらなる浸透と平準化 新入職員、途中採用者、パート職員において、園の理念や方針への認識の深さにまだ個人差が見られる。年度初めだけでなく、学期初めのクラス話し合い等の機会を捉え、全職員が同じ方向を向いて保育に臨めるよう、継続的な意識付けとフォローアップを行う。 2. 園間・フロア間の情報共有体制の強化 日々の多忙感や勤務時間のばらつきから、こども園と保育園の間、また以上児と未満児（別フロア）の間で、一部伝達事項の共有漏れが生じる場面があった。次年度は、インカムや「先生トーク」などのICTツールをさらに日常的かつ効果的に連動させ、小さな気づきや変更点でも全員へ確実に周知できる、より強固な網羅的情報共有体制を確立する。 3. 地域・小学校との繋がり（開かれた園づくり）の推進 年長児の就学前交流など意識的な活動は行えているが、全年齢において地域住民との具体的な関わりはまだ限定的である。散歩時の積極的な挨拶をベースとしつつ、今後は日常の保育の中に地域との繋がりを緩やかに取り入れていけるような活動の工夫を模索し、地域に開かれ、地域から愛される園づくりをより一層推進していく。